

織 豊 政 権

次の文の()に適当な語句を記入し、また下線部についての問に答えよ。

応仁の乱後、約1世紀にわたった戦国争乱も、16世紀半ばを過ぎると急速に統一の機運に向かった。それに最初に成功したのが尾張の織田信長である。信長は、1560年、東海の雄今川義元を尾張の(ア)の戦いで破り、やがて美濃の斎藤氏を滅ぼして、経済力に恵まれた濃尾平野一帯を支配した。そして、13代将軍の弟(イ)をたてて京都に入り、彼を将軍職につけて京都をおさえ、その権威を利用して畿内の平定を進めた。

ついで、姉川の戦いで近江の浅井氏と越前の朝倉氏の迎合軍を破り、さらに、これに加担した比叡山延暦寺を焼打ちした。1573年には、信長に反抗する(イ)を追放して室町幕府を倒し、積年の敵朝倉・浅井両氏を滅ぼした。その後、信長は、三河の長篠の戦いで(ウ)隊をたくみに用いた新戦法で、騎馬隊を中心とする武田勝頼の軍に大勝し、近江に壮大な(エ)城を築いて拠点とした。また、頑強に抵抗を続けてきた宗教勢力を1574年に(オ)で破り、その中心である大坂の(カ)寺を屈服させた。こうして信長は、近畿・中部地方をほぼ掌中におさめたが、中国地方の毛利氏との戦いに出陣しようとしたとき、家臣明智光秀の反乱にあい、京都の本能寺で敗死した。

信長は優れた軍事指揮官として、政治・経済や宗教の伝統的な権威に挑戦して、新しい体制を作ろうとする革新的性格の持ち主であった。征服地には、指出検地を広く実施して公家や寺社の経済的基盤を奪う一方、各地の関所を廃止したり、安土の城下町に商工業者の自由な営業を認める(キ)令を出したりして、城下町が経済的に繁栄するように努めた。また 全国一の経済力もつ自治都市堺を直轄領にするなど畿内の高い経済力を手中にした。

信長のあとをついで、天下統一を完成したのは豊臣秀吉である。備中で毛利氏との対戦中に信長の死を知った秀吉は、ただちに軍を返して明智光秀を討ち、1583年には、信長の重臣であった柴田勝家を賤ヶ岳の戦いに破って信長の後継者の地位を確立した。また、同年、(カ)寺の跡に大坂城を築きはじめ、翌年には尾張の(ク)の戦いで徳川家康らと交戦したのち、和睦した。天下統一をめざした秀吉は、1585年には四国の長宗我部氏をしたがわせるとともに、朝廷から(ケ)に任命され、翌年太政大臣となって豊臣の姓を与えられた。秀吉は天皇から日本全国の支配権をゆだねられたと称し、各地に 戦国大名間の私戦を禁止する命令を発して全国の大名をおさえた。そして1587年それに抵抗した九州の(コ)氏を屈服させ、1590年には小田原の北条氏を滅ぼし、ついで奥羽を勢力下におさめ全国統一を実現した。

この間秀吉は、1588年、京都に新築した(サ)に後陽成天皇を招き、そこで諸大名に天皇と秀吉への忠誠を誓わせた。そしてその権威と武力を背景に支配地を拡大しつつ大名のとりたてや配置換えを行い、畿内を中心に蔵入地(直轄地)を設けた。さらに佐渡相川・但馬生野などの主要鉱山や京都大坂・堺・伏見・長崎などの重要都市も直接支配するとともに、後藤徳乗に(シ)大判などの貨幣を鑄造させ、おもな街道に一里塚を設置して、統一政権の政治と経済の基礎を固めた。

しかし、豊臣政権は秀吉の独裁的傾向が強かったうえ、あいつぐ戦争に追われたので、全国支配のための政治機構を整備できなかった。晩年には石田三成らを五奉行として実務を分担させ、徳川家康らを(ス)として重要政務を合議で決定させる制度を整えようとしたが、彼らの間でしだいに対立が深まった。

問1 16世紀半ば、ポルトガルのイエズス会宣教師として来日し、「堺の町は甚だ広大にして1大なる商人多数あり、此の町はベニス市の如く執政官に依りて治めらる」と書簡に記して堺の状況をヨーロッパに紹介した人物は誰か。また、それら書簡を収録したものは何と呼ばれているか。

問2 この命令を一般に何というか。

問3 この直轄領はどれくらいの規模に達したか。次のなかから1つ選び、記号で答えよ。

あ 約100万石　い 約200万石　う 約360万石　え 約400万石

解 答

ア 桶狭間 イ 足利義昭 ウ 鉄砲 エ 安土城 オ 伊勢長島 カ 石山本願
キ 楽市(・楽座) ク 小牧・長久手 ケ 関白 コ 島津 サ 聚楽第 シ 天正 ケ 五大老
問1 ガスバル・ヴィレラ 『耶蘇会士日本通信』 問2 惣無事令 問3 い